

# 平成27年度 熊本市療育支援ネットワーク会議

## 第3回課題別会議 次第

日時：平成27年11月9日（月）18：30～

場所：熊本市総合保健福祉センター 1階大会議室

### 次第

- 1 開会
- 2 熊本市挨拶
- 3 議事  
テーマ「ネットワークを動かす支援者（人）をどのように支援していくか」について
- 4 閉会

出席委員 菊池委員、山田委員、清田委員、福岡委員、森本委員、田中委員、矢島委員、荻迫委員、後藤委員、硯川委員

事務局 上妻障がい保健福祉課長補佐、井上青少年育成課主幹、林子ども支援課技術主幹、村尾保育幼稚園課主幹、大谷子ども発達支援センター所長、幅発達障がい者支援センターみなわ所長、竹内北区役所保健子ども課地域健康第一班主査、松永総合支援課指導主事

### 議事録

- 1 開会  
(事務局) 略
- 2 熊本市挨拶  
(子ども発達支援センター所長) 略

- 3 議事  
(座長) 開会挨拶

今回が3回目の課題別会議で最後の会議となります。

「支援する人をどのように支援していくか」というテーマで今回が最後の会議となる。これまで熊本市保育園連盟で実施された発達支援コーディネーターを対象としたアンケートと、総合支援課で実施された小中学校の特別支援教育推進体制点検シートをもとに、支援者の抱える課題と解決策を検討してきた。今までのご意見のまとめと「支援者を支援していく仕組み作り」について事務局から説明をしてもらって、それをもとに課題と提案について議論したい。では、まず事務局から説明を。

#### (事務局) 資料説明

- 「熊本市療育支援ネットワーク会議課題別会議平成27年度第3回資料」の説明。

#### 1. 保護者との関わり、保護者への支援についての主な意見。

- ① 園に専門職が出向いて対応の助言をしたり、直接保護者を支援できる仕組みがあるといい。

発達支援が必要な子どもに、早期に丁寧な支援が入ると、社会人としての問題も軽くなる。

支援者には早い時期から保護者の理解を得るスキルを身につけられるよう研修や対応マニュアルが必要。保護者の関わりに専門家も入ってもらい、保護者に直接的あるいは間接的にアドバイスを得られるようネットワークの中で支援が欲しい。

②保護者の力を活用した研修を組むこと。

とりあえずつながっておくがキーワード。長いライフステージの中でいろいろな困りごとが出てくる。これまで子育てをしてきた保護者の力を活用できるよう、保護者が保護者を支援する研修が必要である。

③親のエンパワーメントや保護者同士のネットワーク作りも重要。

身近な場で親を支えるため保護者の悩みを解決する支援体制を作る。保護者は学校の支援体制が見えないので同じ方向を向いていけるよう定期的な面談ができないだろうか。

## 2. 保育園幼稚園での支援体制

①園では研修が実を結んできたが、更なるスキルアップと質の向上をめざすべき。

良い支援をしても、不安がある。専門家の後押しやアドバイスがほしい。

②学校では、教師の理解やスキルに差があり学校内の格差、学校間の格差を是正すべき。

どこに就学しても同じレベルの支援が受けられるよう、見立てと見通しのスキルを含め全体的なスキルアップをはかるべきである。

③個別の教育支援計画の作成と活用に課題があり研修も必要。

個別の教育支援計画は対応指針ではなく同じ方針で共通理解を図るツールである。通常学級でも支援や個別の教育支援計画が必要な子どもが増えている。子どもの共通理解のため、担任だけでなくコーディネーターも一緒にケース会議などで作成・活用をし、保護者と共に目標の再設定を行えるといい。

## 3. 支援体制作りについて

①園では職員に理解の差がある。

共通理解を図るために、園内の研修を充実させる仕組みが作れないか。

②学校内でのチームでの支援体制の充実が必要。

校内で解決できなければ巡回相談員や専門家相談もある。学校現場で特別支援教育コーディネーターを指導的な役割と位置づけ、コーディネーター自身が校内の研修を進められるような特別支援教育体制作りができるといい。小中高12年間の就学期間中に共通理解とライフステージを見据えた支援の立案ができないか。

校内支援体制作りは学校によって差があり、コーディネーターや担任の力量に左右される。1人で抱え込まないように管理職や校内委員会が入りチームとして動くこと。特別支援教育コーディネーターと通常学級の先生との連携が難しく、通常学級では支援を引き継ぐ体制ができていない。先生方は多忙で人材不足の状況もあり副コーディネーターのスキルアップも必要。スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーの活用も有効。

## 4. 関係機関との連携について

①就学時の移行支援について。

・園は毎日保護者に会うため情報交換ができていますが、親も子も抱えている問題を保育要録に記載したが、学校は多忙なせいか担任の理解に繋がらなかった。せつかく記載した保育要録を有効活用してもらいたい。保育要録と移行支援シートは以前よりも活用されてきている。

・学校は、2月頃には園訪問をしている。学校によって担当者が違うが、誰が担当するかの一掃も必要。移行支援シートと児童保育要録の整理を進めていく必要がある。移行支援シートをもとに口頭で情報交換する方法もあるが、個人情報に対するコンプライアンスを守りどれだけ情報を伝えていくとよいかガイドラインや仕組み作りも必要。

・園と小学校と一緒に個別支援のカリキュラムを作れるといい。就学後、園へ様子を報告する小学校がある。

## ②ネットワークについて

・長期的な視点で、多職種との連携やネットワークをどのように広げていくとよいか。顔の見える連携を進め、園で効果的だった工夫を学校でも継続し丁寧に子どもに関わってほしい。

・ブロック会議の機能拡充について、情報交換、地域連携、移行支援の機能を持たせ、専門職に入ってもらい多角的な理解を進めるのはどうだろうか。教育委員会から方針として打ち出してほしい。

・地域ネットに支援者の連携を上手くやっていく仕組みがある。勤務時間外の活動であるため、仕組みとしてはどうだろうか。医療機関との連携で、医師から子どもの状況の説明があると子どもの理解、支援に対する見通しが立てやすい。医療とのネットワークが充実すると、困り感が変わるのではないか。連絡が取りやすい園と取りにくい園がある。園での対応のフローチャートは、若い職員に分かりやすく、関係機関の活用役に役立っている。

## 5、専門職の活用について

ネットワークの中でどう図られているのか整理が必要。専門家の支援、どういう職種にどういう内容が求められているのか明確にできないか。学校、療育、医師、作業療法士、心理職などの視点も大切で、専門職の協力が必要である。多角的に子どもを見ることができ、行動の解釈や支援方法のプランニング、見通しを立てることに役立つ。学校に、専門職が学校現場に入りコンサルテーションしていくことが重要である。総合支援課で専門職をリストアップして招聘できないか。ブロック会議の機能を拡張して、専門家が入り多角的な理解を進めることができないか。療育機関での研修と情報交換も支援に役立つ。

## 6、発達障害の概論から次のスキルアップに、多面的な視点で対応できる研修が求められる。

・医師からの研修は、診断基準などの新しい視点等、知識の更新をしていくためにも必要。社会性、コミュニケーション、こだわり、食事、睡眠の問題等にも示唆がもらえると良い。

・作業療法士は行動の特性を解釈して、支援方法をプランニングし視点を変えた関わり方を伝えることができる。

・心理職は行動分析の観点で、多角的に子どもを見ることができ、行動の解釈や支援方法のプランニング、見通しを立てることに役立つ。

・年代別、経験別、学級種別の研修はどうか。研修の作戦が立てられないか。4年間で通常学級の担任全員が研修を受けるなど、学校的全職員が研修を受ける仕組みがあると良い。

・コーディネーターをネットワークの核、地域のリーダーと位置づけ養成する研修が必要。

・ブロック会議で専門職による多角的な視野を持てるような研修ができないか。

・療育機関の研修では、情報交換でうまくいった取り組み等を学び合うことができている。

・ブロック会議や地域ネットで、連携や支援の成功事例について個人情報も配慮し検討できないか。基礎は集中研修で行い、応用はケース会議で短時間の研修をしていくのはどうか。

・保護者支援のスキルを上げる研修が必要である。保育園、幼稚園では、園内での研修を実

施してスキルアップを図っている。

- ・学校内での研修の充実も必要。個別支援計画は、子どもの見立て、手立て、見通しが立つように作成の研修が必要。共通理解には校内のネットワーク作りが必要。移行支援シートの作り方の研修が必要。コーディネーターが指導的な役割を果たして校内研修を進めていける体制作りが必要。ケース会議を深め、裾野を広げる研修を考えていく時期ではないか。

## 7、その他

- ・熊本市では5歳児健診をしない、という理由をわかりやすく説明してほしい。ネットワーク型の支援システムの中で、園や学校の先生方のスキルを高めて、5歳より早く支援ができる体制を目指しているが「5歳児まで待たないネットワーク健診」などのキャッチフレーズをつけて知らせてほしい。

- ・診断がつかないと支援ができないのではなく「診断よりもまず支援」で対応していきたい。以上が意見のまとめ。

(座長)

2年間の議論をまとめたこの資料はホームページ上で公開される。

つぎに「支援者を支援していく仕組み作り」について事務局から提案と説明を。

(事務局：所長)

2年間の課題別会議の中でいただいたご意見から提案や提言をまとめたい。各分野の専門家のもつ支援スキルをできるだけ支援者に届けたい。専門職のスキルの部分をどういうふうに伝えていくかというところで、ブロック会議、特別支援教育のブロック会議の機能拡充というところに、できれば作業療法士とか、臨床心理士の先生とか、あるいは医師とか、いろんな方たちが学校現場の中に入っていったり、あるいは、保育との連携の中に入っていったりという形が、どうシステムを作ると上手く機能するのか。ネットワーク型発達支援システムについては、地域の中で気づいて必要に応じて専門機関を利用する。さらに、行政サービスをいろいろ利用しながら地域の支援者のネットの活動と連携する。それらをトータルコーディネートするのが発達支援センターというイメージ（ネットワーク型の発達支援システムの説明）。

これらがどのようにするとうまく繋がって機能して動くか。スライドで示すように、子育ての悩みで子ども発達支援センターにおいてになったあと、発達評価と初期支援をして地域に繋いでいくが、行政と繋がったり、保育園、幼稚園と繋がったり、学校と繋がったり、専門支援が提供できる児童発達支援事業所に繋がったり、発達支援ルームに繋がったり、専門医療機関に繋がっており、ケースに応じて必要な繋ぎは、子ども発達支援センターを中心とするネットワークの中で、ある程度はできているところ。

支援を必要とされている園や学校に、どうしたら専門職のスキルを届けられるのか考えると、教育と発達支援ネットワークが上手くリンクする仕組みが必要。

笑顔いきいき特別支援教育推進事業は総合支援課の中で合計21ブロックで、学校教育関係の人たちがそれぞれのブロック別に拠点校を設けながら、総合支援課が総括している。そこに特別支援学校とか総合支援課、巡回相談の先生、専門家チームも入って、保育園、幼稚園、公立、私立も含めてそれぞれの地域のブロックの中で高校まで1つのブロックとして機能して学校の中での支援体制を充実させ、移行支援シートの活用をすすめている。特別支援教育の会議の中には医師会、大学等の専門研究機関、子ども発達支援センター、発達障がい者支援センターみなわ、保育

幼稚園課も入っているが専門家集団、セラピストの方たちが入っていない。これに北と南と東の地域ネットが連携すると各区保健子ども課の保健師さんも絡んでくるので、笑顔いきいき事業の今の仕組みの中に、さらに地域で支える人たちの輪が連携していける。

笑顔いきいきのネットワークと子ども発達支援センターの持つネットワーク、それプラス地域のネット、これらがミックスすると良いのではないかと。そうすると、今まであった笑顔いきいきの関係機関とのつながりに、セラピスト集団が入ってきやすくなる。県の作業療法士会や理学療法士会、それから言語聴覚士会、臨床心理士会、それに療育関係の方たちにお声をかけてお集まりいただく、その中には児童発達支援センターもあるし、事業所もあるし、デイサービスもあるし、発達支援ルームもある。そして、行政関係では障がい保健福祉課や子ども支援課、保育幼稚園課はじめ、引きこもり支援センターリンクの方たちも一同に介して各ブロック会議に参加して意見交換ができるといいなど。各区の夏休みのブロック合同研修会等でセラピスト集団や療育支援者、それから関係機関の顔繋ぎができる。そこから学校の現場の中でのいろんなアドバイスもいただけるよう繋がってほしいと思う。先日、総合支援課と役割分担を含めて提案し、一緒に合同ブロック会議の開催ができるよう協力していくことの共通理解ができた。すでに北、東、南の各ブロックはそれぞれ今お話したような動きで連携活動し始めている。中央と西には地域ネットがまだできてないが、関係する方たちが集まると支援者の輪ができやすくなるのでは、と期待している。そうすると市内5地域全体が地域ネットと教育のブロックとがリンクした形でそれに専門家が入っていきやすいシステムができるのではないかと。子ども発達支援センターと協働した地域ネットの輪が特別支援教育と上手くリンクして行動していくと、学校現場の先生方が専門家の方たちと顔見知りになり各学校のあるいは各小さなブロックごとの勉強会にも専門の先生たちを呼べる流れができる。このように「笑顔いきいき特別支援教育推進事業」と「ネットワーク型の支援システム」をリンクさせた形で、地域の支援者に専門職のスキルが入っていきやすいような流れをつくることを提案したい。

(座長)

事務局から、「ネットワーク型支援システム」と「笑顔いきいき特別支援教育推進事業」をブロック会議の拡充という形で有機的に融合すれば、顔が見えるネットワークが広がり、セラピスト集団(専門職)が持つノウハウやスキルを現場に伝えやすくなる。それにより、各現場の園や学校の先生方の力量をさらに高めていけるのではないかと、という提言がありましたが、いかがですか。

(委員)

総合支援課の笑顔いきいき特別支援教育推進事業の主なメンバーは小中学校の先生方で、幼稚園や保育園、それから高校も呼びかけてもなかなか集まりにくい。成人も含めたネットワークの支援システムの充実をめざすなら、もう少し高い年齢までカバーできる体制が必要。

(座長)

今までは、総合支援課が就学したお子さんを中心に、笑顔いきいき事業を進められてきて、そこに子ども発達支援センターがコーディネートしていき、幼稚園や保育園あるいは、みなわさんともリンクして成人まで含めた幅広い支援の形を融合させて作っていき、という狙いと思うが。

(委員)

幼稚園、保育園の参加はブロックによって差があり、全く園の参加がないブロックもある。未参加園を仲間に入れていかないとスキルの差が縮まらない。高校は差が大きく、私立・県立・市立とあり、専門高校とか、進学校とか、いろいろ高校ごとの事情もある。いろんな子の手立てが必要だ。こういうネットワークを作って、それを高校、幼稚園、保育園も含めて周知して、その中

でも学校ではこのネットワークに対してどう働きかけてサービスを受けられるか見通しが立つと、地域の小学校、中学校以外の方々、成人も含めて広がっていくのでは、と思う。

(座長)

園や高校に対して誘い掛け方に工夫が必要ということ。笑顔いきいき特別支援教育推進事業では、ブロックごとの会議をするときに、どなたがコーディネートのキーマンなのか。

(総合支援課)

21ブロックごとに拠点校があり各拠点校の先生が中心になって開催している。

(座長)

学校の先生が企画するのでメンバーの声も決まってくる。子ども発達支援センターのほうからどう介在していくのか。

(事務局)

ブロック会へ拠点校の先生が、今度どこの誰に連絡して、どんな話を聞こうか、というときに、この先生のお話を聞いたらとっても良かったよ、という情報があれば研修会に呼びやすくなる。総合支援課で先生方のリストは作られてはいるが、講師としてどの先生に頼むかというとき顔が見えてイメージが作りやすいといい。やはり顔が見える連携というのが大事なキーワードと思う。

(座長)

各拠点校の先生が声をかけてもなかなか忙しいとなかなか来てくれないとかいう実情があるわけですけど、そこについてはどんなふうな。

(事務局)

南ブロックの合同研修会には東稜高校の先生が学校の中での支援内容の紹介があり、またお互いを自己紹介しあって課題ごとにグループディスカッションをおこなった。まず顔見知りになることからのスタートかと思う。学校の中での支援スキルを高めるために総合支援課と連携して動きたい。

(座長)

保育園、幼稚園、認定子ども園も含めネットワーク作りは進んできている。発達支援のネットワークと教育現場で実施してきたブロック会議を融合させていくと、保育園、幼稚園の先生方にも学校の先生方との結びつきを強めてもらえるし移行支援とも繋がるので、そんな仕組みを作りたいということ。実際に動かすときの鍵となる部分で非常に重要な話。地域ネットの問題が出ていますが。

(委員)

セラピスト集団の先生方が入ってくださるととてもありがたい。自分も巡回相談でいろんなブロックに出向いているが、なかなか全部回れなかったり日程の都合がつかなかったりする。作業療法士や理学療法士が、21もあるブロックに実際どれだけ来てもらえそうなのか？。

(事務局)

小さなブロック全部に入るというのは難しいが、東西南北中央の5つくらいの場合なら可能かも。夏休みなどの全体ブロック研修会でまず顔を繋いでいただいて、そこから必要に応じて小さなブロックに入っていったりということもある。セラピスト集団は県レベルでPTやOTのチームを作って動いておられるので、そのチームの中で対応できることもある。支援の頻度や講演内容はセラピストの先生と検討が必要。

(座長)

私自身は臨床心理士会の会員ではあるが大学に勤めている人間でもある。医療機関に臨床心理士とか、あるいは作業療法士、理学療法士もいる。児童発達支援センターにもそれぞれ専門職がいる。

地域にある医療機関から誰か一人そういう立場の人がやって来るといった形になる。こういった専門職の集団があることによって、誰々がいないときには誰かが代わりに行きましようみたいな。少なからず謝礼金も出るので、このような形で動いていければ研修の質も上がる。

セラピスト集団からの支援提供について、専門職の立場からみてどう思うか。

(委員)

現状では、力不足・マンパワー不足だが、人材育成も含め前向きに取り組まなければならないと思う。子どもを専門にやっている作業療法士は市内にもまだ少ない。一方、病院に勤務して身体障害の成人に関わる作業療法士は結構いるし、あと狙い目として精神科分野で思春期を診ている作業療法士も何人かいます。ただ畑が違うので小児の方には入りにくいが、作業療法士会にも核になるメンバーがいる。支援の要請があった時に応えられるよう組織を動かしながら、興味があるセラピストを育ててマンパワーを少しでも増やしていきたい。ぜひ関わっていかねばならない分野と思っている。

(座長)

作業療法士会を含めいろんな職種の方がいるが、専門職としてのニーズの掘り起こしみたいな部分はある。今まで声がかからなかったのも、あまり出向く機会もなかったが、声がかかるようになってきたので、こういう分野でこういう力が発揮できるというものをセラピストの人たちにもある程度持ってもらわなければならない。実際に臨床心理士会でも、病院のカウンセリング分野が主だが、医療機関側からブロック会議に心理士を派遣して現場の支援に関われば、将来、発達障害に関しての営業的な側面に気づくことができるかもしれない。

専門職をブロック会議に招聘して入ってもらって送り出す側の専門機関にも何らかのメリットはあるとアピールできれば、ある程度集まる機会を増やしていける。

児童発達支援センターの療育担当者という立場から専門職としてのご意見を。

(委員)

うちの施設からも東ネットや北ネットに参加しているが、療育している者として連携の中に位置づけていただくのはとても必要なこと。移行支援の情報をつないだり、こういう会を通して子どもさんのことを理解できるというのはすごく大事なこと。言語聴覚士として県市会に加入している言語聴覚士は300人以上いるが、小児をやっている者は30人弱くらいで、病院だったり福祉施設だったり児童施設だったり、それぞれのバックグラウンドが違う。病院で小児STリハを受けるなど支援のニーズのあるお子さんは結構おられるが、今までは顔見知り同士が連携をし合っている印象だった。広くいろんな人たちが参加できるように、正式に県士会に申し入れをしてもらえば専門職支援を提供しやすくなるかも。

(座長)

子どもの発達を見ていくためには言語聴覚士、作業療法士、理学療法士の力が非常に重要になる。県士会の専門職に対してもこういうニーズがあることを強くアピールすればいい。学校のブロックを中心に考えているので、保育園幼稚園の立場ではどうなのか。

(委員)

5つのブロックの大きな連携会議だけでも日程を早めに決めていただくと職員を参加させやすい。園は広域に渡って入園されるので、担任や担当者は、子どもの住所がどこかにより北ネットあるいは東ネットにも行きたいが、同じ日に重ならないよう日程の調整が必要。校区は10くらいあるというのが保育園の現状。うちの校区の拠点校さんは、文書を持って園に来ていただくくらい丁寧に対応していただいているのでありがたい。

(委員)

園と小中学校それぞれ行事もあり日程調整は難しいようだが、専門の方と一緒に会議ができるとい

うのは非常に勉強になる。

(座長)

保育園や幼稚園は広域から子どもがくる。西区にある保育園だが住所は東区だとか、そんな時にどこのブロックに参加するのかと。移行支援なので居住地の方に参加した方がいいが。運営上の技術的な問題もあるが日程調整を含めご検討いただきたい。

(委員)

21ブロックをA、B、C3つくらいのチームに分けてもらおうと連日でも行ける。

(座長)

幼稚園保育園だけじゃなく高校も広域から子どもが来るので工夫が必要。

(委員)

地域ネットもこれだけ広がってきているので連携をしていかないといけない。今、中央と西にはまだ地域ネットがない。学校職員でネットを作っても異動もある。放課後等デイサービスの先生方や発達支援センターの担当の職員の方とかを中心に中央と西ネットも作っていけるといい。

(座長)

ネットワークにはいろいろな形態がある。時期を見て、ネットワークという名前がつかなくても中央と西に実質的に機能するネットワークができればいい。勤務時間中に地域ネットに参加するというのは、校長が許可があれば可能ですか

(委員)

北ネットの場合は夜の開催であり、職員の自主的参加になっている。

(座長)

保育園は夜の方がいいですか。時間を指定していれば、勤務時間内でも可能ですか。

(委員)

調整は可能ですが、規模の小さな保育園だと職員が一人抜けたら大変。逆に、夜間に園長が「そっちに行きなさい。」と言って出す場合には手当が付く。

(座長)

多職種が集まるネットワークを作るとなると、いつ、どの時間に集まるのか。子どもを預かっている時間には出れないのでどうクリアしていくのか。

(委員)

南ネットに去年と今年2回行ってみてとてもいいなと思った。いろんな人と知り合いになれるし、こんな時はここに相談ができると教えてもらえるのはとてもありがたかったので、こういうところに参加する機関の方が増えるのはとてもよい。笑顔いきいきの推進事業で講師と呼ぶとお金がかかるが。これから色々な職種の方々を何回呼んでも構わないのですか。

(座長)

予算は大丈夫なのか。

(委員)

特別支援教育研修は、各学校の校内研修に講師の先生を呼んでおこなう研修だが、年1回ぶんの予算は準備しており、複数回の場合は相談してほしい。ただ複数回の学校が多くなると難しい。昨年度は幼稚園、小中高合わせて計70校140回程度実施されている。熊本市内には幼稚園、小中高合わせて市立が146ある。

(座長)

大体半分くらいで開催し、複数回の学校もあるということ。特別支援教育研修と笑顔いきいきとは予算が別なのか。

(委員)

特別支援教育とブロック研修は、予算はそれぞれ別にある。

(座長)

中学校から高校に上がる時など、高校の先生を会議に呼びたい場合に来てもらえそうなのか。

(委員)

特定の高校の先生ならわりと来てくれる、という印象。

(座長)

子ども発達支援センターや「みなわ」からも、高校にも声かけをして参加を促してほしい。  
親の会から何か御意見ありますか。

(委員)

「発達障がいの特化したネットワーク型の研修がなされている」ということを親御さんはあまり知らない。現場の先生方が、熱心に情熱を持ってやっているとわかると、保護者も意識が高くなる。私たち親の会からも発信していきたい。

(座長)

事務局からの提言以外にも何か提言等ないか。  
課題別会議では、保護者の支援が中心議論になったが。

(委員)

保護者の方への研修も必要で、自閉症協会にも講演してもらっている。同じ親がお話しをすると非常に気持ちが傾く。発達障がい疑わしい子どもさんへの支援については、親からしてみれば、どこがどう他の子どもと違うのか認められない、という方が多い中で、でもうちの子も疑わしいから始まりました、という話をするとうるさくなるので、親の会をうまく活用していただきたい。

(座長)

ありがとうございます。そしたら、そういう保護者が自閉症協会や「めだか」さんなどかなり歴史とノウハウを持っている親の会もありますので、そういったところのお力も借りていくという方法もある。

(事務局)

研修では、保護者の方に子育ての視点からほぼ毎年講演をしていただいているが、これから「めだか」さんや自閉症協会さんからも研修の中で色々なお話をさせていただくと保護者に寄り添いながら支援を行いやすくなるので、提言に「保護者支援の研修を組むこと」を入れたい。

(座長)

保護者を支援していく時にその当事者の思いというのは切り離せない。これまでの経験を整理されてきている方に講演してもらい、保護者の立場からするとこういう気持ちです、ということを直接聞ける場があるといい。まだ悩んでいる保護者の方のなかには、親の会に入って繋がりをもったほうがいいという方もいらっしゃる。そういう方を親の会とか保護者の会に繋いでいく役割をこのネットワークの中で作っていい。そういった会を通して顔が見えるネットワークになればと思う。他いかがでしょうか。

(委員)

東ネットを動かしていらっしゃる方々の思いとしては、保護者の方が、子どもさんがまだ小さくて、保健師の方との繋がりの中で、気づきや今後の見通しの相談にのって何かの助けになりたいということが東ネットの趣旨だった。去年から肥後先生の研修でペアレントトレーニングとか、プログラムを勉強するをしておられる。各ネットにしても、そういった動かしていらっしゃる方々の繋がり

がある。そんな方々が集まって情報交換する場があればと思う。

(座長)

東ネットと南ネット、北ネットはそれぞれ設立の経緯が異なる。それぞれのネットの中心的な役割の人達が集まって情報交換をということか。

(事務局)

南ネットでは保護者が代表で、北ネットでは10年前から支援者集団でスタートし研修や支援を自立して活動している。東ネットは東保健福祉センターの呼びかけでスタートされ、今は子ども発達支援センターが主な舵取りをしているが、東ネットで移行支援シートを作っていただき肥後先生の指導でペアレントトレーニングもしている。それから、ペアレントトレーニングについても前向きにチャレンジしていただいている。南ネットでは、保護者支援の輪のところと、支援者の輪のところと2つの動きがあるんですけど、その2つが上手くリンクしてやっていければいいかなと思います。各地域にはそれぞれのキーマンの方がおられ、それぞれの輪の中で同じ方向を向いて地域支援の充実に努力されている。それを子ども発達支援センターが舵取りをしている。

(委員)

保護者の方への研修の件はお願いをしている。規模の大きな研修会と小さな茶話会のようなものの2種類が必要だと思います。うちの子ちょっと心配だと気にされている保護者の中には、自分の心にベールをかけている方もいて、大きな研修会に誘われてもなかなか足が運べない。小学校の見学にも担任が付き添わないと行けないという方が多いような気がします。そうすると、先ほど所長もおっしゃったように、支援センターを訪れた方にはこういった研修の場のお知らせができるということをおっしゃいましたけれども、今後もうちょっと力を入れていただいて、センターに来ない人でも行けるような大きな研修。みなわさんも、いつも素晴らしい講師の方を招かれて研修があっている。保護者の方と一緒に参加させていただいてそう思いますけれど、そういうものは行政でやっていただき、小さな茶話会のようなものは各保育現場でやらないといけない、私たちの課題かなと聞いておりました。あと、コーディネーター研修などに、そういった臨場感のあったお話のできる方、保育現場だけの成功例ではなく、こういった子どもを抱えた経験のある親の会の方たちが、ミニ講話のような形でコーディネーターでお話しいただければ、コーディネーターがそういった保護者と出会った時に、あの会に接続できればと叩くことのできるドアをいくつかお示しいただけるのもありがたいなど。園の中での成功例とかそういった話が多かったように感じますので、お子さんを抱えられた方のお話が聞けるような研修会っていうのが必要かなと感じたところです。

(座長)

保護者支援についての研修に関する貴重な御提言だったと思います。先生がおっしゃったように、今提言していただいているのはブロックごとの研修会、ネットワーク会議みたいなものの非常に大枠ですよね。実際のところは幼稚園、保育園、学校単位でやる細かなという話ではないんですけど、もう少し形式ばった形ではなくて、いわゆる保護者向け、あるいは園内の先生向け、あるいは校内教員向けの研修、学びの場の充実というのは当然行っていかなければならない問題だと認識しております。

(委員)

お示しいただいた表で、保育幼稚園課が左下にあるんですけど、ネットワークの中に入り込めないかなと思いました。

(事務局)

保育幼稚園課は、ネットワーク型支援システムと笑顔いきいきの間の重なるところに実際はあります。保育幼稚園課では児童発達支援ルームの活動で各園の先生方のサポートにも回っておられる

し、保育士の研修もされています。それから、児童発達支援事業も実施されていますので、まさにネットワーク型の支援システムと笑顔いきいきの間を保育幼稚園課が繋いでいただいていると感じています。

(座長)

はい。絵的には、ネットワーク型支援システムの事業と笑顔いきいきの事業ということで、おそらく予算が紐付いているものが増やせるというわけですね。保育幼稚園課で行っている事業の中に、ネットワークに関するものがあれば当然入れようがあるんでしょうけど。基本的には各園に対する事業になっていきますよね。ですから、絵の中だと、どうしてもこういう書き方にせざるを得ないということだと思います。

保育幼稚園課にも予算がついてなくても、この問題についてもかなり絡んでいただいている状況だと思います。ただ、概念図としてはもう少し練ってもらうということですかね。要するに、保育園、幼稚園、学校がもう少し主体的な役割を果たしているかのような絵にしてもらうといい。実際に現場はそこですからね。

長期的な視点でこういったものが必要だとか。先生どうでしょうか。

(委員)

笑顔いきいき特別支援教育事業のコーディネーターを自分もしているんですけども、専門家の先生の一覧とか、巡回相談員の各特別支援学校の先生方の一覧というのは出てくるんですが、例えば児童デイの先生方、東区ならこういう先生方がいらっしゃるというような一覧はあんまり見ない現状なので、地域ネットワークごとの支援の一覧が、発達支援センターとか総合支援課の文書のほうの中にあると、何かのときに活用ができるのかなと感じております。

(座長)

地域ごとの専門家、専門機関を含めてのリストアップ、参考資料みたいなものがそれぞれ現場にあると良いということですね。特に専門家という点で言うと、いかに地域に密着した専門家にってもらうかということが必要になってくると思います。こういう時によくありがちな話で、遠くの神様みたいな話があるんですね。遠くにすごい人がいるという話は聞くけど、あくまで遠くだから来てくれないというのが出てきますよね。なので、遠くの神様、有名な人よりは、神様とは呼べないかもしれないけど近くに身近に存在して来てくれる人がいると良いということですので、そういう基礎的な資料作りというのもお願いできればと思います。

(事務局)

課題別会議の中で提言として、1つは私の方から説明させていただいた部分と、他に保護者支援をしていく研修の話も頂いて、その2つは提言として出していけるかなと思うんですけど、他にもこれは提言として行政全体に波及させてほしいことがありましたら、出していただきたいと思います。それと、最後にお時間が残りましたら、次年度のテーマをどうしようかと考えておりますので、ご提案よろしく申し上げます。

(座長)

今お話しいただきました通り、前半の部分の提言ということについてはいかがでしょうか。いわゆる提言というふうに形付けられなくても、中長期的な視野でこういったものも必要ではないかというような話でもいい。正直、御提言いただいた中で議論し結構網羅できたと思います。

新しく提言いただいた仕組みの中で、いかに先生たちの力量をさらに高めていくかとか。

あるいは、ネットワークを上手く活用していくには工夫が一段と必要だなといったようなことは、色々細かな観点としてあるかなと思います。議論になかったことでも良いです。

(委員)

「5歳児まで待たないネットワーク健診」ですが、ネットワークの中では、子育て支援センターに巡回相談という形で専門家の先生たちが入られて、そこで子育ての相談をして次の幼稚園保育園に繋げたりとか、小学校に繋げたりされている。他のネットでも、またネットワークシステムの中でも同じ形で広がっていくといい。子育て相談が一番入りやすい窓口なのかなと思う。今後どうすすめるのか。

(座長)

子育て相談というのは、発達障がいとかのネットワークとは別個に存在、展開していかなければいけないことかなと思っています。子育て相談だとカバーする範囲がさらに色々増えてきますので。例えば、保護者のうつ的な問題であるとか、経済的な問題ということも入ってきますし、あるいは産後うつみたいな話も当然入ってきます。そうなってきますと、ある程度このネットワーク以外の職種の人たちにもどんどん入ってもらわないとけない問題にもなります。ただ、子育て相談のような窓口を通して、このネットワークに入ってくるという例もあるので、そこの充実が課題なんじゃないか。

(事務局)

今おっしゃったことは、すでに北ネットの巡回相談の中で、すでに実施されています。おひさまクラブの園田さん、北区役所の保健師さん、当センターのスタッフでチームを組んで3つの子育て支援センターを巡回して、その中で御心配のある保護者に寄り添いながら、敷居の低い相談の場から必要なところに繋いでおり、当センターで予算を組んで継続実施しています。

(座長)

もう少し広域な形での子育て支援の充実ということは、おそらくこのネットワークをさらに推進していくためにも必要なことじゃないかなと思いますので、関係部署と連携調整を行っていただければと思います。

(委員)

昨年10月に開所した、「ひきこもり支援センターりんく」の支援は、発達障害と重なる部分が多い。不登校の方や登園拒否をする子どももいるので、取り組み等を聞かせていただきたい。

(座長)

次年度以降のネットワーク会議で何か議論してほしいことはありませんか。

(委員)

私は巡回相談員で中学校、高校などを回っているが、子ども達を見ていて、全体的に幼くなったなという感じがします。またイライラしている子ども達が多くて、先生方もバタバタされているが、親御さんに上手く伝えられなくて、親御さんもわりとイラ立っているような状況もある。経済的なこととか、精神的な安定とか、人との関係性とか、人としてのベースになるところがちょっと薄いのかも。そこをどう考えていこうかというお話も必要な状況が起きる。

精神的な発達面は、社会全体として色々な方との関わりの中で子ども達は育っていきますので、総合的に見て差し上げられるような、そんな社会作り、社会システム、そんなところがあるといいですね。

子ども達が育っていく中で、夢を持って過ごせる、人と笑顔で話ができる、あるいは自分が苛々したときに、こうなんだよと話が出来る、それを聞いてこうやっていこうかなということによって皆と考えていけるような学校だったりとか、友達関係だったりとか、親子関係もわりと自分のことをなかなか伝えられなくて、悶々としている小学生もいる。幼いんだけど行動としては大きな行動してしまうなどのちぐはぐさとか。そんなことを感じながら巡回相談を受けることがあります。

次回のテーマでは、子ども達の育ちや親の経済的なこと、地域の繋がりとか、そういったところも考えていけたらいいと思います。

(座長)

子どもを取り巻く環境というのは以前と大幅に変わってきていて、社会構造の変化であるとか、経済的状况が違って来たということも当然あります。

この会議が主に発達障がいを含め支援を必要としている子に特化してネットワークの検討をいただいていたけれど、ひょっとしたら私たちが想定して話していた支援を必要としている子以外に、これまでとは違うところの理解をしなければいけなかったりだとか、あるいは保護者理解をしなければいけないという事例はかなり増えていて、そういったところも含めたトータルな面での現場における専門性の力量の違いというのが、いま求められてきているものかなと思います。

私も最近では、発達障がいの子どもの話だけではなくて、授業のユニバーサルデザイン化と言っていますけれども、発達障がい以外の子ども達も含めて支援をしていかなければいけないというようなことを中心にお話しさせていただく機会が多いです。我々は発達障がいの子どものことを考えていく専門家ではあるわけですが、ひょっとしたら我々の知見であるとか考え方というのが、その他の子ども達にとってもプラスになることも結構あるのかもしれない。具体的に来年どういう検討するかは分かりませんが、今現在の子どもの取り巻く状況というのはかなり変わってきている中で、専門家に求められてきているものというのは結構違ってきているのだらうと思う。

専門家集団としてのスキルアップ、知識の更新ということも含めて、そのへんもいわゆる支援者を支援していく仕組みとしては重要な観点なのかもしれないなど改めて思いました。

今回で課題別会議は終了となります。2年間にわたり貴重な御意見をたくさんいただきました。次回の代表者会議で、皆様からの御意見や提言をお伝えしたいと思っております。

(事務局)

2年間、支援者をどう支援していくかという難しい課題に、皆様から御意見を色々いただきました。特に保護者支援、専門家集団あるいは療育に携わる人たちが園や学校などの子ども達が育つ場に、どのようなスキルを提供できるのかということも含めて、熊本市全体のネットワークで子ども達を支え支援していく仕組み作りに対して、いただいた御意見をできるだけ反映させていきたいと考えています。子ども達を取り巻く環境が変化している中で、発達障がいがあるとなかろうと、子ども達の幸せに繋がるようなネットワークに向けていっそう充実させていきたいと思っております。今回の支援者を支援していく流れというの、子ども達の幸せのために関わる人たちが皆で輪を作るということが大きな目標だと感じております。2年間にわたり本当に貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。